

Title	拡散現象からみた乱流とカオスのダイナミックス(強い相関をもつゆらぎの統計物理学, 科研費研究会報告)
Author(s)	森, 肇
Citation	物性研究 (1983), 40(5): 54-56
Issue Date	1983-08-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/91108
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

拡散現象からみた乱流とカオスのダイナミックス

九大理 森 肇

乱流は、大小様々な不安定な渦、または、周期の様々な不安定な周期運動からなる *chaotic* な秩序運動である。その発生の機構、臨界現象および乱流輸送現象への関心が統計物理学の面にも急速に広がっている。それは、単に面白い現象が起こるといふことだけでなく、Boltzmann-Gibbsの統計熱力学と異質な、新しい統計的法則がひそんでのりと期待されるからであろう。

乱流の物理的構造を捉えるには、通常、時間相関関数またはそのフーリエラプラス変換、つまり、パワースペクトルが使われる。ここで、粒子の拡散も重要な情報をかえることを示した。粒子の拡散には、1粒子拡散と2粒子の相対拡散とがある。熱平衡下のブラウン運動では両者は同じであるが、乱流では全く異なる。それは、乱流の秩序運動のためである。発生直後の弱い乱流では1粒子拡散が重要であり、発達した乱流では相対拡散が重要である。

発達した乱流を考えよう。単位質量あたりの乱流エネルギーの平均値は

$$\langle u^2 \rangle / 2 = \int_0^\infty E(k) dk$$

とこのこの波数 k の成分に分解できる。エネルギー供給の外部的特性長を L 、粘性のきく散逸領域の特性長を l_d とすれば、正常カスケード領域 $L^{-1} < k < l_d^{-1}$ では

$$E(k) \sim k^{-\delta_0} (kL)^{-\mu\delta_1} \sim k^{-\delta}, \quad (\delta = \delta_0 + \mu\delta_1)$$

というスケール依存性をもつ。ここで μ は次元性指数である。これはこのこのモードへのエネルギー分配則をかえる。熱平衡のエネルギー分配則では $E(k) \sim k^{d-1}$ 、(d = 系の次元数) であるが、乱流では表1の δ のようになる(森, 1983)。ここで、第1行は3次元乱流のエネルギーカスケード、第2行は2次元乱流のエントロピー $\langle \omega^2 \rangle / 2$ ($\omega = \text{rot } u$: 渦度ベクトル) のカスケード、第3行はBénard対流の温度ゆらぎ $\langle \theta^2 \rangle / 2$ のカスケード、第4行は3次元乱流のヘリシティ $\langle u \cdot \omega \rangle / 2$ のカスケードである。 δ_0 は次元解析からきまるものであるが、 μ は、カスケード量の移動率の揺らぎからきまる統計量であり、発達した乱流の統計的状态を規定する藤坂・森の変分原理(1979)を使ってきめた。

いま2つの粒子をいれよと、その距離 $R(t)$ は揺らぎながら増大していく。その2乗平均 $L_*^2(t) \equiv \langle R^2(t) \rangle$ は、統計的に一杯で差別的であれば、

$$dL_*^2/dt = A L_*^{2-\alpha}, \quad (\alpha \equiv \alpha - \mu = (3 - \delta - \mu)/2)$$

にしたがうことがわかる(高吉・森, 1982)。ただし $L_* < L$ とした。2次元乱流で

は、表1の第2行から $\alpha=0$ であり、これは $L_*^2(t) \sim \exp(At)$ を示す。
 $\alpha \neq 0$ のときは

$$L_*^2(t) \sim t^\psi, \quad (\psi = 2/\alpha)$$

がえられる。 ψ の値は表1にまとめられた。 $L_*(t)$ は増大し、 L に達する。その後も、一様異方であれば、線形則 $L_*^2(t) = L^2 + K(t-t_c)$ にしたがう。ただし、 $K \equiv AL^{2-\alpha}$ は定数である。

外からエネルギー供給がなければ乱流は減衰する。時刻 t のレイノルズ数が $R_t = R_0/(1+pt)^\beta$ に従って減衰するとしよう。ここで p は減衰定数、 β は減衰指数である。 β の値は乱流によって異なるが、その典型的なものは $\beta = 1/5, 3/7, 1$ である。正常カスケード領域の最も大きな渦の直径を L_t とすれば、 $L_*(t) < L_t$ と $L_*(t) > L_t$ とでは、拡散法則が異なる。それを、表2の第2段に示した(森, 1983)。

このように拡散指数 ψ は、0 から ∞ までの諸々の値をとる。熱平衡のブラウン運動では、つねに $\psi=1$ であった。1からのズレは、その乱流の渦の秩序運動の特徴を反映するものである。

発生直後の弱い乱流では、相対拡散は殆んど起らず、1粒子拡散に、乱流の空間的構造および *strange attractor* 中の不安定な周期運動が反映される。これも面白い向題であり、機会があればお話ししたい。

表1. 正常カスケードの特性指数

カスケードの保存量	d	δ	μ	α	ψ
$\langle u^2 \rangle / 2$	3	$(5+\mu)/3$	$0.341 \approx \frac{1}{3}$	0.439	4.56
$\langle \omega^2 \rangle / 2$	2	$(9+\mu)/3$	0	0	∞
$\langle \theta^2 \rangle / 2$	3	$(11+3\mu)/5$	$0.261 \approx \frac{1}{4}$	0.191	10.5
$\langle \underline{u} \cdot \underline{\omega} \rangle / 2$	3	$(7+\mu)/3$	$0.203 \approx \frac{1}{5}$	0.198	10.1

- 第1行 : 通常の3次元乱流
- 2 : 2次元乱流
- 3 : Bénard 対流 (温度の揺らぎ $\langle \theta^2 \rangle / 2$ が正常カスケード)
- 4 : ヘリシティをもつ3次元乱流

TABLE 2. DIFFUSION EXPONENT ψ OF THE RELATIVE DIFFUSION

	d	$L_*^2(t) \sim t^\psi$	ψ	
steady (p=0)	2	$e^{At}, (\alpha = 0)$	∞	$\langle \omega^2 \rangle / 2$
$L_*(t) < L$	3	$t^{2/\alpha}, (\infty > \psi = \frac{2}{\alpha} > 2)$	10.5	$\langle \theta^2 \rangle / 2$
			10.1	$\langle \underline{u \cdot \omega} \rangle / 2$
			4.56	$\langle u^2 \rangle / 2$
$L_*(t) \gg L$		t	1	purely random
decaying (p≠0)	2	$(1+pt)^{A_0/p}, (\alpha = 0)$		
$L_*(t) < L_t$	3	$[(1+pt)^{1-x} - 1]^{2/\alpha}, (x = 1 - \alpha(1-z)/2 \neq 1)$		
		$[\ln(1+pt)]^{2/\alpha}, (x = 1)$		
$L_*(t) \gg L_t$		$t^{1-z}, (1 > \psi = 1-z > 0)$	0.80	z = 1/5
			0.57	z = 3/7
			$\ln t, (z = 1)$	0